研究ノート

近代日本・アジア関係視覚資料の所蔵・公開・研究の現状

橋 谷 弘

- 1 はじめに
- 2 錦絵
- 3 絵葉書
- 4 古写真
- 5 鳥瞰図
- 6 おわりに

1 はじめに

近年,近代日本・アジア関係の視覚資料が次第に注目されるようになり、その調査や収集が進むとともに、デジタルアーカイブとして広く公開されることも多くなった。本稿は、日本・韓国・台湾を中心に、現状をできるだけ網羅的に紹介し、今後の利用のためのガイドを示したものである。同時に、様々な公開の方法を比較しながら、デジタルアーカイブのあり方や、視覚資料の将来性についても問題を提起したい。また、それらの視覚資料を使って具体的にどのような研究が可能なのか、既存の成果を検討していく。

2 錦絵

江戸時代の浮世絵木版画の系譜に連なる錦絵は、幕末・維新期に横浜絵・開化絵・錦絵新聞など新たな主題を生み出したが²⁾、やがて西洋画や写真に押されて衰退していった。その最後の流行といえるのが、日清・日露戦争を描いた戦争錦絵だった。日露戦争ごろからは、写真家や洋画家による戦争の記録が主流になっていくので、これに先立つ日清戦争期が戦争錦絵のピークといえるだろう。

日清戦争を主題とする錦絵の多くがデジタルアーカイブとして公開されているが、このような錦絵の検索に便利なのが、「日清戦争錦絵美術館」³⁾ である。Web サイトの運営の主体は不明だが、しっかりした内容で現在も随時更新されており、2020年6月現在で206点がリストアップされている。本稿も、錦絵のデジタルアーカイブに関しては同 Web サイトに

よるところが大きい。

日清戦争は朝鮮半島とその近海を主な戦場としていたので、錦絵の主題も朝鮮が中心とな る。このため、日本が朝鮮を植民地統治していた時代から、すでに日清戦争錦絵の展覧会が 開かれていた(朝鮮総督府図書館 [1937])。現代のデジタルアーカイブとしては、まず国立 国会図書館「日清戦争錦絵」4) 172 点がある。また、東京経済大学所蔵桜井義之文庫の「朝 鮮関係錦絵コレクション [5] 132 点は、日清戦争以外の主題も多いが、日清戦争の錦絵が 21 点含まれている。桜井文庫の錦絵に関しては、2020年11月からデジタルアーカイブの画質 や検索システムが一新され、新たに冊子の図録として東京経済大学図書館[2020]も刊行さ れた。同様の内容で単行本となっているのが、個人コレクションをもとにした姜徳相 [2007] 137 点と、韓国独立記念館のコレクションをもとにした尹素英「2014]で、内容は 後述する。一方、対戦国である中国(清)を視野に入れたユニークなデジタルアーカイブが、 アジア歴史資料センター・大英図書館共同インターネット特別展「描かれた日清戦争〜錦 絵・年画と公文書~ 🏻 である。これは大英図書館所蔵の日清戦争関係版画 235 点にアジア 歴史資料センターが解題を付けたものだが、この中には錦絵とともに中国の年画 56 点が含 まれている(平野「2014])。このほか、広範なテーマのデジタルアーカイブの中に日清戦争 錦絵が含まれるものとして、静岡県立中央図書館7)や函館市中央図書館8)所蔵のものなど があるが、詳しくは前掲「日清戦争錦絵美術館」を参照されたい。

また、さらに総合的な錦絵データベースから、アジア関係のものを検索することもできる。 東京大学史料編纂所「錦絵データベース」⁹⁾ では、同編纂所・静岡県立中央図書館・横浜開 港資料館が所蔵する錦絵の目録が検索でき、日本・アジア関係の錦絵も多く含まれている。 国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」¹⁰⁾ のような広範なデータベースでも、 検索によって日本・アジア関係の錦絵などの資料を抽出することができる。

次に、朝鮮関係の錦絵の図版に解説を付けて出版された書籍としては、まず前述の姜徳相 [2007] がある。この本は、著者が所蔵する錦絵 300 点のコレクションの中から 137 点(錦絵以外の資料やコレクション外のものも若干含む)を収録したものである。征韓論、日清・日露戦争など同時代の事件や戦争を描いたものから、神功皇后の「三韓征伐」、元寇、文禄・慶長の役などの「歴史」を描いたものまで網羅し、当時の日本人の朝鮮観・中国観に与えた影響を考察している。尹素英 [2014] は、韓国の独立記念館と個人(南周鉉)の所蔵する朝鮮関係錦絵を中心に、征韓論から日露戦争にいたる近代日朝関係のテーマを取り上げ、同書の副題にある「歴史をどう歪めたか」という視点から、外交史料なども交えながら論評されている。

これらの研究以前の、朝鮮関係錦絵に関する先駆的な研究としては、桜井 [1977] をあげるべきだろう。この論考は、基本的には現在東京経済大学図書館所蔵となっている桜井氏旧蔵コレクションの解題だが、幕末期の風刺画の意味する内容の解説など、留意すべき論点が

示されている。

戦争錦絵の中心を占める日清戦争錦絵を主題とした歴史研究としては,原田 [2000] が基本文献であろう。原田は,まず従軍した新聞記者・画工・写真師の総数を確定し,明治浮世絵における戦争錦絵の位置づけを明らかにしたうえで,錦絵作家の系譜をまとめている。錦絵の画題も読み解かれており,たとえば戦闘場面に馬と刀が好んで描かれたのは武士イデオロギーのあらわれではないかという指摘もある。

日清戦争錦絵については、前述のアジ歴・大英図書館のアーカイブにも収録されている中国の年画と比較しながら、辻 [2011] が興味深い分析を行っている。これによれば、近代の年画は錦絵の影響も受けながら西洋の文物、皇帝の肖像、時事問題など、それまでみられなかった主題を描くようになった。また、日清戦争や台湾出兵についても日中双方で描かれているが、その描き方には違いがある。とくに年画に国民の団結や戦意高揚の意図がみられないのは、媒体としての利用に対する為政者の認識が日本と異なっていたからではないかとしている。一方錦絵には、年画にみられない相手国に対する蔑視感があらわれるようになる。そして日清戦後は日本の錦絵が衰退して飾り絵へと回帰していくのに対して、中国の年画はやがて共産党のプロパガンダに使われて生き残っていくという対比も指摘されている。

3 絵葉書

絵葉書はヨーロッパで19世紀後半に考案され、日本でも1900年に私製葉書が認可されてから発行されるようになった。日本では一般に「絵」葉書と呼ばれているが¹¹⁾、絵画をもとにしたものや木版画によるものよりも、むしろ当初から写真を原版としたものが多く、資料的価値は高い。絵葉書は通信手段として使われただけでなく、広くコレクションの対象となり¹²⁾、写真機を個人で所有することが難しかった時代には、旅行記念や土産物として写真代わりの役割を果たしていた。したがって、未使用の状態で今日まで残されているものが多く、その種類は膨大な数になる。

旧植民地を中心とするアジア地域の絵葉書も多くみられ、20世紀後半になると古写真と同様に写真集としてまとめられ、出版されていた¹³⁾。古写真に比べて絵葉書は風景・風俗・建築など主題が明確であり、構図や画質も良質なため、絵葉書が出典だと示さずに写真集に使われる例も多かった。しかし、絵葉書を歴史資料として扱い、関連する情報を調査・整理しながら公開されるようになったのは、比較的最近のことである¹⁴⁾。特に、現存する絵葉書が量的に膨大なことから、近年はデジタルアーカイブとしてインターネット上に公開される場合が多い。

代表的なものをあげると、まず中国を中心として北東アジア全体をカバーした京都大学東南アジア地域研究研究所の「戦前期東アジア絵はがきデータベース」¹⁵⁾ が 2005 年から公開

され、日本本国・中国・満洲・台湾・朝鮮・樺太・南洋・極東シベリアを主題とする 約 2500 点が収められている。中国全土について、日本との関わりが深い場所を中心としたデ ジタルアーカイブには. 愛知大学国際中国学研究センター 「中国戦前絵葉書データベー ス」16) があり、地方別・都市別に検索可能である。また、学習院大学東洋文化研究所のデジ タルアーカイブ「アジアの肖像:学習院大学所蔵古写真」¹⁷⁾ には,「中国大陸絵葉書資料」 が収められている。このほかにも学習院にはデジタル化されていない絵葉書が多数あるよう で、同大学所蔵絵葉書から300点以上を選び、都市別に分類して解説を付けたものが、村松 弘一ほか [2018] である。国立民族学博物館の「松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション」¹⁸⁾ は、 海軍の訓練航海の途上で購入されたもので、系統的ではないが貴重な資料も含まれ、170点 が公開されている。海外では、日本・日本植民地・中国に関する5万点以上の絵葉書に加え て、ポスター・ラベル・日用品などを含むアメリカのラップナウ・コレクション(the Rupnow Collection) がよく知られている。今のところインターネット上での公開や常設展示の 場はないようだが、日本国内で一部が展示されたことがあり(図録として立命館大学 [2016]・早稲田大学 [2019]), また二松 [2018] がこのうち 390 点を使用して日本近代史を 概観しながらアジア関係のテーマにも言及している。同じくアメリカでは.ラファイエット 大学図書館 (Skillman Library Special Collections, Lafayette College) の East Asia Image Collection¹⁹ がデジタルアーカイブを公開しており、日本・アジア関係の絵葉書や古写真が 数多く含まれている。

台湾に関するデジタルアーカイブは、台湾国家図書館の「臺灣記憶 Taiwan Memory 系統」²⁰⁾ に「日治時期臺灣圖像写真」「台北市老照片」がある。タイトルは写真(照片)だが、収録されている図像はほとんど絵葉書をデジタル化したものである。このアーカイブには、地方紙や卒業アルバムなど紙媒体も収録されており、有用である。また、出版物として台湾関係の絵葉書が続々と刊行されているが、上記のデジタルアーカイブと関連する國家圖書館閲覽組編[2007][2009] が代表的なものである。地方政府でも、周盟桂ほか[2004]などの図録が出版されている。

朝鮮に関するデジタルアーカイブとしては、国際日本文化研究センターの「朝鮮写真絵はがき」²¹⁾が、高麗美術館研究員だった山本俊介の収集した6,516点という多数の資料を公開している。このうちの一部は、白幡洋三郎・劉建輝編著[2017]として刊行されている。同じく数が多いものが佐賀県立名護屋城博物館のコレクションで、約2,600点にのぼる。残念ながら今のところデジタルアーカイブとしては公開されていないが、その全貌が浦川和也編[2017]として刊行されている。同書には、朝鮮関係絵葉書をめぐる様々な論考も収録されており、とくに書誌学的考察が綿密に行われている。学習院大学東洋文化研究所の前述のアーカイブには、朝鮮を中心として満州(中国東北、以下同じ)・北海道を含む「風俗写真・絵葉書資料 |²²⁾ がある。また、岩手県奥州市の斎藤実記念館にも絵葉書のコレクション

があり、ニチマイ [2008] に収録されている。立命館大学国際平和ミュージアムには 167 点が所蔵され、楠井 [2012] で紹介されている。韓国では、韓国コンテンツ振興院が「葉書でみる近代ソウル (엽서로 보는 근대서울)」²³⁾ をデジタルアーカイブとして公開している。釜山博物館にも朝鮮全土を対象とした 3,724 点の絵葉書コレクションがあり、刊行物として早산박물관 [2009] と早산근대역사관 [2003] が出されている。前者は所蔵する絵はがきが主題別に分類されて全て収録され、後者はその一部を使って釜山近代歴史館で開催された展覧会の図録である。

満州に関しては、日本大学文理学部が絵葉書だけでなく古写真やポスターなども含めた収集・研究を精力的に進めている²⁴⁾。デジタルアーカイブとして公開されているのは、同学部アジア歴史資料デジタルアーカイブ「ハルビン絵葉書」²⁵⁾ 1,177 点と、同学部資料館デジタルミュージアム「二神コレクション」「青地コレクション」²⁶⁾ である。とくに「ハルビン絵葉書」は、地図と連動させた検索システムが、意欲的な試みとして評価されるべきである。「二神コレクション」は、二神照夫旧蔵の黒竜江省牡丹江に関する絵葉書・地図・書籍・写真のコレクションのうち、絵葉書をデジタル化したものである。「青地コレクション」は、1939~41 年に満州の地質調査に赴いた青地清彦が収集したもので、一部経由地の朝鮮の絵葉書も含まれる。このほか満州絵はがきを収録した書籍としては、秦源治ほか [2018] が日文研所蔵の絵葉書を使用し、大連生まれの秦の生活の記憶を記した著作からの抜粋とともに紹介されている。

絵葉書を使った研究は、錦絵と同様に絵葉書に込められた意味を読み解くというものと、次に示す古写真と同様に過去の街並みや建造物を再現する資料として使おうとするものに大きく二分できる²⁷⁾。今のところ、数量的に主流となるのは後者で、基礎的な事実を確定する作業としては非常に重要だが、デジタル化されて誰もがアクセスできるようになった場合には、単なる写真のキャプションのような解説の意義は薄れていくだろう。

ここでは絵葉書を読み解く視点や、そこから派生する問題意識の多様性を示すような研究 成果をいくつか紹介しておきたい。

台湾に関してバークレー [2008] と Barclay [2010] は、1937年から 41年にかけて赴任したアメリカ領事の絵葉書・写真のコレクションの全体像を詳しく紹介しながら、少数民族を「原始的野蛮人」として興味の対象とし、独自のイメージが作られたことを指摘している。これらの絵葉書の描くヤミ族やタイヤル族の姿には、作成者の好むイメージや先入観が反映されているとして、それが具体的に検討される。同時に、その背後にある総督府や日本人写真家、出版業者が創出した意図的な台湾イメージにも言及されている。

一方,山路 [2009] は、台湾のツォウ族を題材とした昭和期の8枚の絵葉書を手掛かりとして、それ以前の「野蛮性」を強調した画像から「生活改善運動」などの成果を示す画像への変化という政治的意味を読み取り、絵葉書制作の背後にうかがえる現地協力者(「先覚

者」)の存在と、彼らの抱える文化的葛藤を描き出した。また、李欽賢 [2003] は、写真絵葉書ではなく、台湾美術展覧会(台展)に出品した日本人画家の作品を印刷した絵葉書の主題を、美術史の視点から紹介した小冊子である。以上のような植民地期台湾の絵葉書発行の歴史とその主題の特徴などは、バークレー [2016] で簡潔に概説されている。

韓国では、人類学の視点から植民地期の絵葉書について論じた研究として、迅학의 [2003] がある。この論文は、写真による「再現の政治学」という観点から、植民地期の絵葉書とその元になった写真を読み解いている。そして、総督府による旧慣調査の成果である「朝鮮風俗」の写真が、絵葉書となってオリエンタリズムや帝国主義の視点を大衆化したり、観光パンフレットにも転載されて朝鮮のイメージを作り上げたりしたことが具体的に指摘される。また、現代韓国の外国人向け印刷物にも同様の構図がみられるという、ポストコロニアリズムの問題にも言及されている。前述の台湾に関するバークレーや山路の研究とも重なり合う論点があり、興味深い指摘である。観光と絵葉書に関しては、楠井 [2012] でも論じられ、絵葉書と文化人の紀行文を結び付けながら、「未開」=朝鮮、「文明」=日本という「観光のまなざし」が形成されていく過程がたどられている。 引 受 [2010] も絵葉書にあらわれた釜山の近代観光について、紹介している。また、オリエンタリズムや帝国主義との関連では、崔賢植 [2011] が、歌謡「アリラン」を印刷した多数の絵葉書を分析し、植民地的な「作られた伝統」としてのアリランが流布されていく経緯と問題点を整理している。

満州に関しては、貴志 [2010] が、「満洲国」時代のビジュアル・メディアとして、ポスター・絵葉書・切手を広範に紹介分析しており、総合的な研究成果として基本的な文献である。また、毛利 [2016] は、ハルビンから投函された絵葉書を分析し、その画像情報と私信の文面によって、エキゾティシズムとエロティシズムのあふれる国際的歓楽都市というハルビンのイメージが作り出され、コンテンツ・ツーリズムの先駆けとなったと問題提起している。軍事郵便絵葉書という題材に着目した張守祥 [2011] は、絵葉書に印刷された中国人のセリフやカタカナ書きの中国語を分析して、日中の接触言語の使用状況を具体的に分析するというユニークな方法をとっている。

一方,次に触れる写真術の導入と同様に、絵葉書の流行も日本・アジア関係だけでなく、アジアの近代史を考えていくときに重要なテーマになる。日本植民地以外の一例として、孙孟英 [2017] をあげておく。これは学術書ではなく、上海で 1930 年代に創業した王開写真館の現・総経理が聞き書きを交えてまとめた小冊子だが、西洋人を顧客とする上海の写真館が発行した絵葉書の主題の変遷が要領よく紹介されている。当然ながら、中国の風物がオリエンタリズムの主題となっているのだが、興味深いのは、1935 年に王開写真館が絵葉書の題材を求めてオーストラリアで撮影した先住民の写真に、中国人による差別的な視点がみられることである。西洋人の需要を意識した撮影主題の選択とはいえ、中国人が、オリエンタリズムの視線の対象から主体へと転じている。このような変化が、日本も含めてアジアの各

地で起こっていたことをうかがわせるエピソードである。

4 古写真

古写真(刊行物になっていないもの)は、第二次大戦前に海外に赴いた日本人が撮影したものが、撮影者や所蔵者の物故とともに公にされる事例が増加しているようで、このところ収集・公開が急増している。また、ガラス乾板のような一点物の写真を発掘する努力も続けられている。残存する資料の数の多さは絵葉書以上であり、時間的にも劣化したり廃棄されたりして消滅する危機を迎えていて、収集・保存の取り組みの拡大が望まれる。さらに、オリジナルな写真資料だけでなく、写真集に収められたものや絵葉書なども含めて、一括して画像資料としてデータベース化する試みも始まっている。その場合には、膨大なデータの分類・検索の手法が問われることになるだろう。

中国・朝鮮・モンゴルなど北東アジア全域を対象とした古写真資料としては、亜東印画協会 (大連)が、1924年から44年ごろまで会員向けに毎月配布していた月刊のアルバム『亜東印画輯』に広範な映像が収められている。これをデジタル化したアーカイブの一つが、東洋文庫「亜東印画輯」²⁸⁾で、京都大学人文科学研究所所蔵のものも補足されているが、欠号もある。国立国会図書館デジタルコレクションでも一部が閲覧できるが、東洋文庫のものと重複している。前述の日本大学文理学部資料館「デジタルミュージアム」²⁹⁾にも、一部が収められている。また、いくつかの公共図書館や国立民族学博物館にも所蔵されているが、デジタル化はされていないようである。所蔵機関や収録部分については人間文化研究機構(NIHU)「統合検索データベース」³⁰⁾で検索できる。他の画像資料に関しても、同データベースで検索可能なものがあり有用である。東洋文庫には、このほか「『亜細亜大観』データベース」³¹⁾があり、亜細亜写真大観社(大連)が上記の『亜東印画輯』と同様の地域・主題・配布方法で発行したものが、1926年から40年まで閲覧できる。

ユニークな内容を持つのが、一橋大学図書館「戦前期アジア諸国写真コレクション」³²⁾である。これは、陸軍経理学校が研究のために収集した昭和初期から第二次大戦にかけてのアジア・太平洋諸地域の写真 3,705 点をデジタル化したもので、北中国、インド、東南アジアのものが多い。風俗・風景・民族・産業などが対象だが、絵葉書や配布写真集とは主題や視点が異なり、うまく目的に合えば他のアーカイブにない情報が得られる。

建築写真に関しては、京都府立総合資料館「近藤豊写真資料」³³⁾の一部に、朝鮮の古建築が含まれている。このアーカイブ構築のプロセスについては村上ほか [2014] に紹介されているが、建築史研究者の近藤豊が撮影した約6万点の建築写真をデータベース化したもので、朝鮮に関しては戦前に撮影された寺院や官衙の写真を地図上から検索することができる。

テーマを絞り、写真に限らず書籍や図面など様々な資料を総合したデータベースが、神奈

川大学非文字資料研究センター「海外神社(跡地)に関するデータベース」³⁴⁾である。これは、旧植民地を中心に戦前のアジア各地にあった神社に関して、当時の写真、戦後の跡地写真、関連資料を検索できるもので、満州国建国神廟と台湾神社の復元動画や関連書籍もみることができる。

人類学に特化したものとしては、鳥居龍蔵の調査資料を中心とする東京大学総合研究博物館「東アジア・ミクロネシア古写真資料画像データベース」が、2,500点以上の所蔵資料のうち満州・台湾など910点の写真をデジタル化している³⁵⁾。鳥居をはじめとする人類学者の残した写真資料についての研究紹介は、後述する。

台湾に関しては、台湾大学図書館「臺灣舊照片資料庫 |36) が非常に有用である。これは植 民地期の様々な出版物に掲載された写真を一枚ずつデジタル化し、検索可能にしたもので、 約 37,000 点に及ぶ。検索語も多岐にわたっている。このような,出版物に掲載された画像 のデジタル化は、著作権に配慮しながら今後広げるべき方向を示しているだろう³⁷⁾。数量 的には、行政院のプロジェクトである「國家文化資料庫 |³⁸⁾ が、408,726 点の古写真を公開 している。ただし、20世紀後半のものが圧倒的に多く、それ以前の写真も中国本土で撮影 されたものが含まれている。しかし、植民地期台湾に関する写真に限っても、かなりの数に なり、ほかのアーカイブで得られないものも多い。また、中央研究院デジタル文化センター (中央研究院數位文化中心)「典藏臺灣」39)は、古写真以外にも多くの資料が含まれている。 植民地期の古写真に関して、たとえば「照片」「日治」で検索すると 41.155 点がヒットし、 「撮影」で検索すると「日治時期家族相簿」3.124点. 「日治時期業餘撮影家」18.091点. 「日 治時期榮業寫真館」16,382 点が 18 人の撮影者ごとに分類されて閲覧できるという膨大なア ーカイブである。同センターでは、現在の地図と近代の古地図、古写真を照合できるスマホ 用のアプリも開発している40)。このほか、台北芸術大学「台灣老照片數位博物館 |41) もあっ たが、現在は閲覧できない。これらの台湾のアーカイブだけでなく、中国全体の古写真に関 する情報も含めて、日本の国会図書館のリサーチ・ナビ「写真:中国・香港・台湾」42)で逐 次紹介されている。

韓国の写真アーカイブについては、이경민 [2002] が主な所蔵機関の状況を紹介し、日本の動向も参照しながら写真アーカイブ構築の必要性と方法論を提起している。

古写真に関しても、様々な視点から論じた研究がある。本稿でいう古写真、つまり印画紙やガラス乾板に現像した写真の分析や紹介だけでなく、それを使って出版された書籍の問題点や、写真術の導入、写真師、写真館などについても言及されている。

絵画に比べると、写真は情景をそのまま映し出しているように思えるが、結果的に写真が 真実を物語っているとは限らない。金泰雄 [2011] は、韓国近現代史の概説書と教科書に掲載された歴史的写真を詳細に検討し、出所不明の写真や転載を繰り返された写真のキャプションの誤り、撮影当時の意図的な歪曲、レイアウトの変更やトリミングによる印象操作、劇 映画の一場面が歴史写真として出回った事例など、多くの問題を含む実例を具体的に列挙している。もちろん、教材として、文字に比べて写真が持つ利点も述べられているが、それ以上に、史料批判が不十分な写真を利用することの問題点が印象に残る。

前述の戦争錦絵に入れ替わって登場する戦争の報道写真に関しては、井上 [2012] が、従 軍写真家の経歴や、写真の構図などにみられる作為性も含めて紹介している。

また、初期の写真集について論じたのが、이연전 [2018] である。この研究では、朝鮮の 開港・開市 8 都市に関する写真帖から『京城府之巻』をとりあげ、他の都市の写真帖と比較 しながら収録された写真を主題別に分類し、分析している。結論としては、日本人居留地が 既存都市と異質の要素を持ち、日本式と西洋式が混在する都市空間を形成したことなど、特に目新しい論点は示されていないものの、写真集を詳細に読み解くという研究方法は学ぶべき点であろう。陳其松 [2018] は、1871 年のアメリカ朝鮮遠征艦隊に同行した日本在住の写真家ベアトの撮影した写真と、これを使ったアメリカの大手絵入新聞の図版を検討している。そして、図版の原板を制作する際の改変や、現場の状況とは異なるキャプションなどを洗い出し、その結果つくられた「朝鮮イメージ」をあぶり出している。

写真雑誌と植民地の関係については、半田 [2019] の問題提起がある。この研究では、「芸術写真」「新興写真」の雑誌といわれていた『満州グラフ』をとりあげ、そこに現れた「ネイティヴ」の写真が文明―野蛮という二項対立を表すだけでなく、日本女性・ロシア女性がジェンダーの枠内で「近代性」を象徴する存在として描かれていることを指摘し、報道だけでなく「芸術」にも植民地表象がみられると論じている。

ユニークな研究としては、太田 [2013] が社会文化人類学の視点から、古写真の表す「内容」ではなく、「モノ」としての意味を検討している。一つの論点は、現代の研究者が、撮影背景など写真の「生産」について論じているようにみえながら、実は研究対象・資源として写真の「消費」をめざしているという指摘である。消費という観点は、さらにソウルの古物商のフィールドワークに基づいて、顧客の消費行動の中にモノとしての写真との相互作用を見出している。歴史研究とは異なる観点からの問題提起だが、写真を歴史資料として扱う場合に留意すべき論点も示されている。

次に写真の社会的意味に関連して、20世紀前半までは、写真機が技術的にも価格的にも大衆化されていなかったので、残された古写真も個人の撮影したスナップ以外のものが多い。代表的な例が記念写真などの肖像写真で、これらは街の写真館で撮影されたものだった。簡 永彬 [2019] は植民地台湾の写真館について、その名称や所在地、経営した写真家、流行した技法などを紹介している。写真家の多くが日本の写真学校に留学し、その影響を受けていたことなどが指摘され、作品の図版も多い。ただし、写真そのものの読み取りにはほとんど言及されていない。黄耀進 [2016] も、植民地期の新聞を使いながら、写真館、写真団体、写真印刷などの実態を紹介している。一方、이경민 [2008] は、写真館も含めて、植民地朝

鮮において近代の写真文化がどのような社会的影響を与えたかを多面的に論じたエッセーである。身分証明・手配写真・記念写真・写真新婦・エロ写真など、写真というものの持つ多様な役割が検討され、これを史料として用いる際に留意すべき問題を示唆している。朝鮮から渡米した写真新婦については、田中[2012]による紹介もある。

以上のように、西洋近代文化がアジアに及ぼした影響を論じるとき、写真の導入は重要なテーマになりうる。アジア各国でも、これをテーマとした議論がみられるが、ここではその一つの例として、上海への写真術の導入以来の主要写真家・写真団体、写真館、フォトジャーナリズム、商業写真などを総合的に叙述した王天平ほか [2016] をあげておく。

台湾に関しては、人類学と古写真に関する多くの論考がみられる。前述の東京大学総合研究博物館のアーカイブをはじめとして、人類学者の撮影した古写真が多く残されているので、これに関して様々な問題が提起されてきた。鳥居龍蔵撮影といわれる写真群をめぐっては、皆川 [2010]・[2012] が詳細に検討したうえで、撮影された季節と鳥居の滞在時期のずれ、被写体の警官の制服の制式と撮影年のずれを指摘し、撮影者が誰であったか疑問を呈している。一方、范如菀 [2011] が鳥居らのガラス乾板保存の重要性を指摘しているが、皆川は范の博士論文に依拠しながら、鳥居使用のガラス乾板と異なるサイズの乾板が含まれていることにも留意すべきだとしている。このように、写真に付随して伝えられてきた情報が確実か否かという検討は、一種の史料批判として重要である。

一方,本稿の絵葉書の項でも紹介したバークレーは、写真についても面白い指摘をしている。バークレー [2015] や Barclay [2018] 第 4 章によれば、鳥居の写真が学術的な用途以外にほとんど使われなかったのに対して、次の世代の森丑之助らの写真は絵葉書・新聞・教科書など様々なメディアに複製が使用され、それは絵葉書や博覧会の流行という、時代の傾向を反映したものだという。また、複製する際に画像に現れた微妙な変化に、意図的な利用の痕跡を読み取っている。

台湾では、古写真と現代の歴史の記憶をつなぐという興味深い論点から、いくつかのフィールドワークが行われている。原 [2014] は、現代のタイヤル族作家・趙啓明による「記憶の発掘」を紹介したもので、言語学者・浅井恵倫が1938年に撮影した写真を、タイヤル族の古老に見せながらインタビューした内容に触れられている。同様に過去の映像と現代をつなぐものとして、旧アチックミューゼアム所蔵資料を継承した神奈川大学常民文化研究所の行った、パイワン族居住地でのフィルム上映会の反応が、高城 [2015] に紹介されている。このフィルムの元になった渋沢敬一の調査や、その後の発表形態については原田 [2015] が論評している。また、清水 [2014] も鳥居や浅井の写真と現代のフィールドワークを結び付けた著書で、重要な事実も示されているが、同時に原田 [2014] の書評で提起された映像研究の方法論からの疑問にも留意する必要がある。このほか、馬淵東一の写真に関する山本ほか [2010]、瀬川孝吉の写真に関する松澤 [1995]・山本 [2000]・魏 [2000] は、写真その

ものを読み解いたものではないが、撮影の背景や写真の意義について紹介している。また、 宮内庁書陵部所蔵の、台湾に関する明治天皇「御手許写真」について、梶田 [2010] が紹介 している。

5 鳥瞰図

鳥瞰図はルネッサンス以来,ヨーロッパで都市を表現する絵画あるいは地図として盛んに刊行されてきたが,昭和期の日本では吉田初三郎⁴³⁾ や金子常光⁴⁴⁾ の工房による独特の鳥瞰図が人気を呼んだ。吉田や金子の鳥瞰図は、デフォルメされた構図と観光名所や交通などの詳細な情報によって人気を呼び、今日でも様々な形で収集公開が進んでいる。その対象は旧植民地や中国にも及び、図像そのものが興味深いためか海外でも復刻版が刊行されている。以下、日本国外のアジア諸地域を主題とした鳥瞰図に絞って紹介したい。

吉田初三郎の鳥瞰図のデジタルアーカイブは、まず京都府立京都学・歴彩館「京の記憶アーカイブ」⁴⁵⁾ に、朝鮮・満洲・樺太・台湾のものが31点含まれている。また、八戸クリニック「街かどミュージアム」⁴⁶⁾ でも、朝鮮・中国・台湾・樺太のものが10点公開されている。滋賀大学経済経営研究所「デジタルアーカイブ旧植民地関係資料検索」⁴⁷⁾ は、観光案内や市勢要覧を中心としたアーカイブだが、この中にも鳥瞰図が含まれている。

海外で書籍として刊行されたものとして、台湾に関しては金子常光の原画で1933年から36年にかけて出版された鳥瞰図を中心に収録した莊永明[2013]がある。中国に関しても、吉田や金子を中心とする様々な鳥瞰図を集成した锺翀[2018]がある。

これらのアジア地域を対象とした鳥瞰図を読み解いた研究は、日本本国を対象とするものに比べて不十分で、まだ緒に就いたばかりである。その中で阿部 [2003] は、彦根高商の資料を引き継いだ滋賀大学のコレクションの解題だが、吉田の鳥瞰図にも若干触れられ、図の案内文の読み取りや日本列島のデフォルメの解釈などによって、そこに込められた植民地観にも言及されている。また、他の文献と合わせて、植民地ツーリズムの実態を解明する史料としての可能性も示唆されている。中西 [2019] は朝鮮を主題とした吉田の鳥瞰図を 35 点指摘し、その中で代表的な 1929 年の『朝鮮大図絵』を取り上げて、そこに含まれた文字情報を網羅的に分類したものである。基礎作業としては重要だが、鳥瞰図の解釈を示す結論には至っていない。

以上のような鳥瞰図とは別系統のものが、小野三正が作画し、朝鮮新聞社が1936年に発行した『大京城府大観』である。これは今日の3D画像や、有名なバルバリ『ベネチア景観図』(1500年)のように、街路や一つ一つの建物を正確に描写したもので、資料的価値は高い。しかし所蔵機関は限られ、大判な掛図のため使い勝手がよくなかったが、서울역사박물관「2015」の刊行によって利用の便が図られた。この図録は、ソウル歴史博物館が所蔵する

『大京城府大観』の京城府の部分について、分解して複写しながら冊子の形にしたものである。同図の仁川の部分についても、 김용하ほか [2017] が刊行されている。また、 서울역사 박물관 [2018] は、同図の商業地域の部分と、 商店の写真入り要覧である『京城都市大観』を、 対照できるよう冊子として編集したものである。

この『大京城府大観』は、吉田初三郎や金子常光の鳥瞰図のような題材の選択や景観のデフォルメがみられず、客観的な描写に徹しているため、描かれた意図を読み解いて解釈するという性格のものではない。しかし、その詳細な情報は、視覚資料として今後も様々な用途が考えられそうである。

6 おわりに

以上のように、近年の視覚資料の収集・公開・研究の進展は目覚ましいものがある。さらに、インターネットやデジタル技術の発達によって、デジタルアーカイブという形で新たな可能性が開かれている。同時に、公開や利用にあたって、従来主流だった文字資料にない難しさがあり、今後の研究の進展のためには、さらに議論を深めていく必要があるだろう。

一つの難しさは、どのような検索システムを作るかということである。画像の場合、文字資料のように同じ基準でつけられたタイトルがなく、コンテンツの要約も不可能である。したがって、適当な検索語を設定して検索させることになるが、これまでのところ所蔵機関によってその形式はまちまちである。さらに、絵葉書や古写真の場合、地図との連動なども工夫されているが、これも統一された基準はない。

また、検索方法が次第に標準化されれば、複数の機関が所蔵する視覚資料の横断的な検索も可能になる。その場合、将来の課題として、このような連携を推進する何らかの組織が必要になるだろう。本稿の注 30 にあげた人間文化研究機構のサイトのような、リンクを貼った「データベースのデータベース」も一つの可能性を示している。

次に、本稿でも紹介した台湾大学図書館「臺灣舊照片資料庫」のように、既刊の出版物から画像を一枚ずつ取り出してデジタル化するという試みも、著作権の問題を解決できれば、歴史資料として利用の可能性を大きく広げるものだろう。一枚ずつ独立して所蔵される写真や絵画の検索以上に、写真集などに収録された個々の写真を検索することは非常に難しい。台湾大学のプロジェクトはこれに挑戦したもので、大きな意義があると思うが、これを日本で本格的に進めることは一つの機関の能力を超えた課題であり、何らかの大規模プロジェクトが必要になるだろう。さらに、視覚資料という範囲を超えて、文字資料なども含めて歴史資料のデジタル化は世界的に進行中であり、おそらく専門外の筆者の知見を超えた新しい動きもあるのではないかと思われる48)。

一方、視覚資料を使うにあたって、さまざまな方法論を模索する必要があり、その一端は

本稿で紹介した先行研究にもあらわれている。個々のコメントは繰り返さないが、非常に多様なアプローチがみられ、今後の研究の進展が楽しみである。

注 ———

- 1) 本稿は、2019年11月30日に行われた東京経済大学学術フォーラム「東アジア近代史視覚資料の再発見——東京経済大学図書館所蔵『桜井義之文庫』『四方博朝鮮文庫』を中心とする討究」における筆者の報告「近代日本・アジア関係視覚資料の所蔵・公開・研究の現状」をもとに、大幅に加筆したものである。
- 2) 近代の錦絵に関する代表的な図録や解説として、次のようなものがある。

国立史料館編『明治開化期の錦絵』東京大学出版会, 1989年

土屋礼子編『日本錦絵新聞集 CD-ROM』文生書院, 1999 年。

木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生――かわら版と新聞錦絵の情報世界』東京大学総合研究博物館、1999 年

宗像盛久編『横浜開化錦絵を読む』東京堂出版、2000年。

千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞――東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』国書刊行会, 2008 年。

野々上慶一編『文明開化の錦絵』日本図書センター、2013年。

- 3) https://nissinsensonishikie.jimdo.com/ (2020年9月1日最終閲覧,以下同じ)
- 4) http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1311472
- 5) https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000719tkudb(このサイトのみ, 2020年11月から公開)
- 6) https://www.jacar.go.jp/jacarbl-fsjwar-j/index.html
- 7) http://multi.tosyokan.pref.shizuoka.jp/digital-library/top
- 8) http://archives.c.fun.ac.jp/fronts/index/ukiyoe
- 9) https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller
- 10) https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/
- 11) 外国では日本の官製はがきのような無地の葉書がほとんど使われなかったせいか、英語の postcard や中国語の明信片など、単に「葉書」を指す言葉が絵葉書を意味している。韓国語 では「小진엽서(写真葉書)」という言葉もよく使われる。
- 12) 鈴木文子「玩具と帝国――趣味家集団の通信ネットワークと植民地」(『文学部論集』第93号, 2009年3月)は、主として郷土玩具収集に注目しながら、絵葉書も含むコレクターのネットワークについて論じている。また、向後恵理子「日本葉書会――日露戦争期における絵葉書ブームと水彩画ブームをめぐって」(『早稲田大学教育学部 学術研究』第58号, 2010年2月)はアジアとの関係ではないが、1904年設立の日本葉書会をテーマとして、コレクターのネットワークの誕生と、その美術史的、社会史的意味について論じている。
- 13) 絵葉書や古写真を使った出版物は多数あるので、本稿で紹介するものは、アジア関係の特定のコレクションを出典として、デジタル化されていないものに限定する。
- 14) 朝鮮・満洲の絵葉書を中心として、研究動向を簡潔に紹介したものとして、毛利康秀「歴史イメージとしての絵葉書――研究の動向および社会的意味の再検討」(『年次研究報告書』20、

2020年4月)がある。

- 15) http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000022PPC
- 16) https://iccs.aichi-u.ac.jp/database/postcard/
- 17) http://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/c05_koshashin/index.html
- 18) http://nmearch.minpaku.ac.jp/matsuo/index.html
- 19) https://dss.lafayette.edu/collections/east-asia-image-collection/
- 20) http://memory.ncl.edu.tw/tm cgi/hypage.cgi?HYPAGE=index.hpg
- 21) http://db.nichibun.ac.jp/ja/category/chousen.html
- 22) https://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/c05_koshashin/c0502_huzoku.html
- 23) http://www.culturecontent.com/content/contentView.do?search_div=CP_THE&search_div_id=CP_THE010&cp_code=cp0434&index_id=cp04340124&content_id=cp043401240001 &search_left_menu=5
- 24) 収集・保存の経緯や解題については、以下の文献を参照されたい。大平知香「日本大学文理学部資料館所蔵『青地清彦氏旧蔵絵葉書』の一考察――戦前期発行「満洲」・朝鮮に関する絵葉書資料を中心に」(『年次研究報告書』12,2012年4月)、高橋望ほか「絵葉書を介したハルビン都市景観の変遷の印象調査」(同前)、竹ノ内悠「日本大学文理学部資料館展示会『現された「満洲国」―〈満・蒙〉影写の多様性と受容―』について――日本大学文理学部所蔵満蒙関係写真資料の保存業務と展示会の報告を中心として」(『年次研究報告書』16,2016年4月)、溝井慧史「日本大学文理学部「満洲」関係寄贈資料の修復と活用について――松浦薫氏旧蔵写真アルバムとガラス乾板を例に」(『年次研究報告書』18,2018年4月)、松重允浩ほか「公開シンポジウム 日本大学文理学部におけるビジュアル資料の収集と活用:実例から見る修復、保存、管理、公開における課題と未来」(『年次研究報告書』19,2019年4月)、竹ノ内悠「日本大学文理学部所蔵満蒙関係資料の整理・目録化作業について」(同前)、加藤直人ほか「日本大学文理学部所蔵満財東アジア関係ビジュアル資料のデジタルアーカイブ構築に向けての基礎的研究」(同前)、岩田陽子ほか「日本大学文理学部所蔵「満蒙」関係資料の整理・保存活動の中間報告」(『年次研究報告書』20,2020年4月)、中田崇「日本大学文理学部資料館所蔵『赤木英道旧蔵記録』『資料解題・赤木英道略歴』について」(同前)。
- 25) http://ahj.chs.nihon-u.ac.jp/harbin/
- 26) http://ahj.chs.nihon-u.ac.jp/dm/
- 27) このほか、貴志俊彦は建築史・美術史、メディア史・政治学、印刷技術史、情報資料学・文献 学という4つのアプローチを指摘している。貴志俊彦「東アジアを描く非文字資料のデータ ベース化」(『歴史と地理』2006年5月号)。
- 28) http://124.33.215.236/research/atoinga/atoinga_top.html
- 29) 注26と同じ。
- 30) https://int.nihu.jp/
- 31) http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib4/
- 32) http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/18
- 33) http://www.arc-ritsumei.com/commercial-cwsn
- 34) http://www.himoji.jp/database/db04/
- 35) http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DJinruis/torii_catalogue/hajime.php

書籍化されたカタログも複数出版されており、同サイトの参考文献にあげられている。

- 36) http://photo.lib.ntu.edu.tw/pic/db/oldphoto.jsp
- 37) 写真集そのものをデジタル化しても、掲載された写真を1点ずつ検索することはできない。日本国内に関しては、デジタル化以前の時代に村上清子「国立国会図書館所蔵写真帳・写真集の内容細目総覧:明治・大正編」(『参考書誌研究』33,1987年)のような目録作成が試みられているが、このような目録とデジタル化された写真集とのリンクが必要だろう。
- 38) http://newnrch.digital.ntu.edu. tw/nrch/query.php?keyword=%E8%80%81%E7%85%A7%E7 %89%87&advanced=
- 39) https://digitalarchives.tw/
- 40) 書籍版は、中央研究院數位文化中心『臺北歷史地圖散歩』台灣東販,2016年、同『臺中歷史 地圖散歩』台灣東販,2017年、同『臺南歷史地圖散歩』台灣東販,2019年。
- 41) プロジェクトの概略は http://husscat.hss.ntu.edu.tw/xmlui/handle/123456789/7697
- 42) https://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/pic-chn.php
- 43) 関連図書として、さしあたり、湯原公浩編『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、2002年、および堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む――描かれた近代日本の風景――』河 出書房新社、2009年を参照されたい。
- 44) 金子常光については、藤本一美「地図楽 吉田初三郎の弟子達の群像① 金子常光・中田富 仙・柳城隆 おもに日本名所図絵社製の作品」(『地図情報』第36巻第1号,2016年5月)を参照されたい。
- 45) http://www.archives.kyoto.jp/websearchpe/list?pn=1&cls=top&refind=&dispnum=200&AN DOR=0&sort=&VARIANT=1&DISPVIEW=matrix&secIdx=0&c1_l=1&c1_f=%E5%90%89% E7%94%B0%E5%88%9D%E4%B8%89%E9%83%8E%E3%80%80&imginfo=&c1_a=1&chkCls=1 11_komonjo_group&chkCls=112_komonjo_catalog&chkCls=122_gyosei_group&chkCls=123_gyosei_catalog&chkCls=131_picture_group&chkCls=132_picture_catalog&chkCls=141_mode rn_lit_group&chkCls=142_modern_lit_catalog&chkCls=151_old_books_group&chkCls=152_o ld_books_catalog&chkCls=211_art_craft&chkCls=221_history&chkCls=231_yoshikawa_man ner&chkCls=241_yoshikawa_book&chkCls=251_ema_manner&chkCls=261_ema_book&chkC ls=271_tape_film_etc&chkCls=281_rec_tape&chkCls=351_temple_info&chkCls=361_magazin e_essay&chkCls=371_chronicle&chkCls=381_public_relations&order=0
- 46) http://www.ne.jp/asahi/machikado/enjoy/collection/5_yoshidahatusaburou10.html
- 47) https://mokuroku.biwako.shiga-u.ac.jp/eml5.asp?mode=manmougazo
- 48) 最近も、歴史学研究会が「特集 進むデジタル化と問われる歴史学」(『歴史学研究』1000, 2020年9月)を刊行した。また、本稿で紹介した以外にも、歴史的写真に関して中国社会科学出版社《中国近代映像资料库》https://dokochina.com/sim2traconv.php、シンガポール国立公文書館 https://www.nas.gov.sg/archivesonline/photographs/など、アジア各国で近現代史の画像資料のデータベース化が進んでいる。日本のデータベースにも、たとえば「朝日新聞歴史写真アーカイブ アジア・戦前戦中編」のように、図書館向けで有料のため、本稿で紹介しなかったものがある。

文献リスト

1 錦絵

日本語文献(著者名50音順)

姜徳相編著「2007]: 錦絵の中の朝鮮と中国 —— 幕末・明治の日本人のまなざし、岩波書店

朝鮮総督府図書館編[1937]: 日清戦争錦絵展観会目録, 朝鮮総督府

桜井義之 [1977]: 明治時代の「錦絵」にみる朝鮮問題: 明治期対韓意識研究の一試考 (『作新学院 女子短期大学紀要』4)

辻千春 [2011]: 日中両国の報道版画 — 19 世紀末に現れた錦絵と年画にみる日清戦争の描き方を中心に(『名古屋大学博物館報告』No. 27)

東京経済大学図書館 [2020]:東京経済大学図書館所蔵 桜井義之文庫 朝鮮関係錦絵コレクション図録集,東京経済大学図書館

原田敬一 [2000]:戦争を伝えた人びと — 日清戦争と錦絵をめぐって (『文学部論集』84)

平野宗明[2014]:大英図書館との共同企画によるインターネット特別展「描かれた日清戦争: 錦絵・年画と公文書」(『アーカイブズ』54)

尹素英(朴美京訳)[2014]:明治日本の錦絵は韓国の歴史をどう歪めたか、韓国独立記念館

2 絵葉書

日本語文献(著者名50音順)

浦川和也編(崔吉城企画監修/朴昊遠等訳)[2017]: 그림엽서로 보는 근대조선 1-7, 民俗苑 (ソウル)

貴志俊彦 [2010]:満洲国のビジュアル・メディア――ポスター・絵はがき・切手、吉川弘文館
株世港文 [2012]: 様屋 世間鮮にサイス [類半のまなざし」の形成 立合館大学国際更知 2 a

楠井清文 [2012]: 植民地朝鮮に対する「観光のまなざし」の形成――立命館大学国際平和ミュージアム所蔵絵葉書と文化人の紀行文を中心に(『アート・リサーチ』12)

白幡洋三郎・劉建輝 編著 [2017]: 異邦から/へのまなざし 見られる日本・見る日本, 思文閣出版

張守祥 [2011]: 「満洲国」における言語接触——新資料に見られる言語接触の実態(『人文』10) ニチマイ編「2008]: 朝鮮絵葉書集. ニチマイ

バークレー,ポール (池上直子訳) [2008]:「日本通」の目を通して見た台湾——太平洋戦争直前 にアメリカ領事館が収集していた絵葉書と写真 (『台湾原住民研究』12)

バークレー, ポール [2016]: 植民地台湾を映す日本の絵葉書概要 1900-1945 (立命館大学国際 平和ミュージアム [2016] 所収)

秦源治・劉建輝・仲万美子[2018]:大連ところどころ――画像でたどる帝国のフロンティア, 晃 洋書房

二松啓紀 [2018]: 絵はがきの大日本帝国、平凡社新書

村松弘一・貴志俊彦編 [2018]: 古写真・絵葉書で旅する東アジア 150 年, 勉誠出版

毛利康秀 [2016]: ハルビン絵葉書と日本人――ツーリズムの視点からみた「メディアとしての絵葉書」の再検討(『年次研究報告』16)

山路勝彦 [2009]: 絵葉書の民族誌,あるいは植民地の表情――皇民化時代,先覚者の描いた台湾 ツォウ族の自画像(『台湾原住民研究』13)

立命館大学国際平和ミュージアム [2016]: 絵葉書にみる日本と中国 THE RUPNOW COLLEC-TION 1894-1945. 同ミュージアム

早稲田大学政治経済学術院現代政治経済研究所 20 世紀メディア研究所編 [2019]: イメージの中の日本と中国の近代――ラップナウ・コレクションから、日本中国友好協会

中国語文献 (著者名拼音順)

國家圖書館閱覽組編 [2007]: 日治時期的臺北, 國家圖書館國家圖書館閱覽組編 [2007]: 日治時期的臺南, 國家圖書館國家圖書館閱覽組編 [2009]: 日治時期的臺中, 國家圖書館

李欽賢「2003]:台灣的風景繪葉書. 遠足文化

孙孟英[2017]:明信片,三联书店

周盟桂撰文・鄭徳慶總編輯「2004]:高雄老明信片、高雄市政府文化局

韓国語文献(著者名가나다라順)

권혁희 [2003] : 일제시대 사진엽서에 나타난 "재현의 정치학" (『한국문화인류학』 36 권 1 호) 김연주 [2010] : 사진엽서로 보는 부산의 근대 관광 (『e- 기록 속으로』 2010 SUMMER + 제 2 호)

부산근대역사관 [2003]: 사진엽서로 떠나는 근대기행. 부산근대역사관

부산박물관 [2009]: 사진엽서로 보는 근대풍경 1~8. 부산박물관

崔賢植 [2011]: 제국의 취향, 전시되는 "아리랑"——식민지 "아리랑 엽서"의 성격과 의미 (『大東文 化研究』제 75 집)

英語文献

Barclay, Paul D. [2010]: Peddling Postcards and Selling Empire: Image-Making in Taiwan under Japanese Colonial Rule, "Japanese Studies" 30-1

3 古写真

日本語文献(著者名50音順)

井上裕子「2012]: 日清・日露戦争と写真報道 --戦場を駆ける写真師たち、吉川弘文館

黄耀進 [2016]: 植民地統治初期の台湾に於ける写真についての一考察 (『中国語中国文化』13)

太田心平 [2013]: 写真のマテリアリティ――現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論 (『国際常民文化研究叢書』3)

梶田明宏 [2010]:書陵部所蔵明治大正期台湾関係写真帖について (『書陵部紀要』62)

魏徳文 [2001]: 台湾の貴重な文化資産の重大な発見――『瀬川孝吉 台湾原住民族写真誌』の出版 にあたって(『台湾原住民研究』5)

清水純 [2014]: 画像が語る台湾原住民の歴史と文化――鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探求, 風響社

高城玲 [2015]: アチックフィルム・写真と現地上映会——薩南十島と台湾パイワン族を中心に (『国際常民文化研究叢書』10)

田中景 [2012]: 20 世紀初頭における朝鮮人「写真花嫁」の渡米 (『歴史評論』第744号)

陳其松「2018]:19世紀アメリカ新聞紙から見る朝鮮印象――ベアトによる朝鮮遠征の関連写真を

めぐって(『東アジア文化交渉研究』11)

- バークレー,ポール [2015]:戦前のメディアに使用された森丑之助の台湾原住民「屈尺蕃」写真:博覧会,新聞,教科書,絵葉書,雑誌での使用例の検討(『台湾原住民研究』19)
- 原英子 [2014]: 台湾先住民族の古写真解読による記憶の発掘——浅井恵倫の写真をつかった人類 学的調査報告の紹介(『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』16)
- 原田健一 [2014]: 書評・新刊紹介 『画像が語る台湾原住民の歴史と文化: 鳥居龍蔵・浅井恵倫撮 影写真の探究』清水純著(『台湾原住民研究』18)
- 原田健一 [2015]: 渋沢敬三と植民地・台湾——『台湾高雄州潮州郡下 パイワン族の採訪記録』と "The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines: the Yami Tribe" をめぐって(『国際常民文化研究叢書』10)
- 范如菀 [2011]: 写真原板保存の重要性に関する考察: 鳥居龍蔵の撮影した台湾の乾板写真を中心 として(『台湾原住民研究』15)
- 半田ゆり [2019]: 他者としてのネイティヴと女性——『満州グラフ』における植民地表象の様式 (『映像学』101)
- 松澤員子 [1995]: 写真で見る日本統治期の台湾先住民の生活:瀬川孝吉氏の写真資料紹介 (『民博 通信』68)
- 皆川隆一 [2010]: 鳥居龍蔵撮影〈海辺の景〉の疑問――紅頭嶼古写真調査ノート (1) (『台湾原住 民研究』14)
- 皆川隆一 [2012]: 鳥居龍蔵撮影〈七つ釦〉の疑問: 紅頭嶼古写真調査ノート (2) (『台湾原住民研究』16)
- 村上晴澄・佐藤弘隆・矢野桂司・福島幸宏・土橋誠 [2014]:近藤豊写真資料のデジタルアーカイ ブ構築と過去の景観――写真資料の GIS 化を通して (『立命館地理学』第 26 号)
- 山本芳美 [2001]:70年の時を経た、台湾原住民の写真群 (『台湾原住民研究』5)
- 山本芳美・原英子・清水純 [2010]: 馬淵東一アーカイブの台湾写真を整理して(『台湾原住民研究』14)

中国語文献(著者名拼音順)

簡永彬·等「2019]:凝視時代——日治時期臺灣的寫真館, 左岸文化

王天平·蔡继福·贾一禾编着 [2016]:民国上海撮影—海派撮影文化前世之研究,上海世纪出版

韓国語文献(著者名かいい라順)

- 金泰雄 [2011]: 韓國 近現代 歷史寫眞의 虛實과 整理方向——국사 개설서와 7차 교육과정 교과서를 중심으로 (『歷史教育』119)
- 이경민 [2002] : 사진아카이브의 현황과 필요성 고찰——한국근대사 관련 사진자료를 중심으로 (『역사민속학』 14)
- 이경민 [2008]: 경성——사진에 박히다, 산책자
- 이연경 [2018] : 경성부지권 (京城府之卷) 외 사진첩애 재현된 일본인 거류지의 도시공간의 성격과 그 특징 (『한국공간디자인학회논문집』 13-3)

英語文献

Barclay, Paul D. [2018]: Outcasts of Empire: Japan's Rule on Taiwan's "Savage Border," 1874–1945, University of California Press

4 鳥瞰図

日本語文献(著者名50音順)

阿部安成 [2003]: 植民地朝鮮をデッサンする——彦根高等商業学校収集資料の読み方, Working Paper Series, Faculty of Economics Shiga University 電子版, No. 79

中西遼太郎 [2019]:近代の鳥瞰図に描かれた朝鮮半島:吉田初三郎「朝鮮大図絵」の文字情報の 分析、『歴史人類』47

中国語文献(著者名拼音順)

锺翀 [2018]:旧城胜景日絵近代中国都市鸟瞰地图(増订版),上海书画出版社 莊永明 [2013]:台灣鳥瞰圖——一九三〇年代台灣地誌繪集,重版,遠流出版

韓国語文献(著者名가나다라順)

김용하·도미이 마사노리·도다 이쿠코 [2017]: 조감도와 사진으로 보는 1930 년대. 十香

서울역사박물관 [2015]: 大京城府大觀, 서울역사박물관

서울역사박물관 [2018]: 〈대경성부대관〉과 『대경성도시대관』 으로 보는 경성상점가, 서울역사박물관